



朝陽に輝く紫宸殿

冬

京都御所小史 板谷 英彦



絶えまない人と自然の連携を象徴するメビウスの連環。これが息の長い活動が期待される自然保護のシンボルマークに表現されています。

発行人
〒602-0881 京都市上京区
京都御苑3番地
☎075-211-6364
一般財団法人 国民公園協会
京都御苑 池田善一

編集
白川書院

監修
環境省京都御苑管理事務所
本紙は再生紙を使用しています。

一、場所について
ア、京都御所
御所(内裏)は、天皇のお住まいであり儀式等の行われるご活動の拠点でした(なお、京都御苑は御所の周りに大きく緑地を取り囲んでいますが、この緑地は江戸時代以前には公家の屋敷が建ち並んでいた場所で、現在でも九条家、閑院宮家等の遺構が残されています)。

広い京都御苑の中には、どこまでも続く築地塀に囲まれて、京都御所と仙洞・大宮御所があり、いにしえのたずまいを今に伝えています。
今回は、その歴史を簡単にご紹介いたします。どちらも皇室用財産として宮内庁京都事務所で管理しておりますので、ご関心の方は宮内庁ホームページ等を参照してお申し込みの上、ぜひ足をお運びください。

場所、度重なる火災にあつた末に次第に使われなくなり、外戚の藤原氏をはじめ貴族の屋敷を里内裏として使うようになりました。現在の場所も里内裏を発端として、南北朝の動乱の時代の頃から内裏の場所として定着したものです。



雪化粧した仙洞・大宮御所庭園

二、建物について
京都御所と仙洞・大宮御所の建物について

であられた東福門院のために建造されました。東福門院は二代将軍徳川秀忠の娘であり、当時の将軍家は天皇の外戚になることを強く望み、実際にこの御所に即位した。また、後水尾天皇の御譲位についても、紫衣事件で江戸幕府との軋轢が深く影響しており、江戸幕府初期の朝廷との間、複雑な関係が影を落としています。

は、いずれも幕末の一八五四年に火災でほとんどが焼失しました。このうち京都御所については直ちに翌年についでに直ちに翌年に焼失前の旧態に再建されました。十八世紀末の寛政年間の考証を基に、古制の復興として最も重要な紫宸殿や清涼殿、紫宸殿の周りの回廊、後宮の一部(飛香舎等)は平安時代の建築の復興となつています。



日常のお住まいだった御常御殿と御内庭

このため、これらについては江戸時代の建造にもかかわらず、源氏物語の当時から再現実た建物が見られます(なお、即位の礼等が行われた建物である紫宸殿には、現在、今上陛下、皇后陛下が即位の礼で御使用になった高御座、御帳台が置かれています)。
なお、天皇の日常のお住まいであった御常

御殿等は近世の書院造の様式となっており、御所内には建物の目的用途によりいくつかの時代の建築様式が並立しています。
一方、仙洞・大宮御所の建物は、一八五四年に焼失した後、大宮御所だけが慶応三年(一八六七)に英照皇太后(孝明天皇の女御)のために建造され、現在では天皇皇后両陛下の行幸啓、皇太子同妃両殿下の行啓の際の御宿泊所としてご使用されています。

下御霊神社
五月第三または第四日曜日は還幸祭として鳳輦や神輿を中心として氏子区域内を巡行し、寺町通は露店で賑わいます。八月十七・十八の両日は例祭にあたり、かつて宮中で催されていた御神楽や東遊を神前奉奏しております。神輿や祭具にも皇室関係から御寄進されたものが数多く伝えられています。
(下御霊神社 宮司)

京都御苑の南東隅を外れた寺町丸太町下るに鎮座する下御霊神社は、天正十八年(一五九〇)の豊臣秀吉の市街地改造によって今の地に移ってきました。その前は新町下立売辺りにあり、その地へは一条大路の北にある下出雲郷の地から水害に流されて来たといわれています。
平安時代の史書『日本三代実録』には、貞観五年(八六三)五月二十日の記事によると、折からの悪疫の鎮静を祈って神泉苑で御霊会が斎行され、その時の六座の祭神が当社と一致するところから、この年を創祀としています。
当時の平安京は、疫病と政争と災害の都で病と御霊八所神と称される祭神は、この時代の政争の中に無実に戻せられて御霊として祟つた怨霊であり、朝廷としても最も恐れられていたのです。
こうして祀られた御霊系神社は中世になると、地域の守護神である氏神信仰に変化して、江戸時代には今のようにな信仰形態を完成させます。
職人町によって構成された氏子地域には今も公家衆に出入していた職人の子孫が数多く神祇調度の製作に携わっているのも、京都の伝統を守りつづける地域といえましょう。



下御霊神社



有形文化財指定の本殿

京都御苑の近隣を訪ねて
下御霊神社
出雲路 敬直

催事案内

平成28年京都御苑自然教室

初心者の方を対象に自然教室を行います。冬の御苑の草花やキノコ、昆虫や鳥を観察しましょう。

冬の自然教室「冬の御苑にふれよう」

1月24日(日)9:30~12:00

主催 環境省京都御苑管理事務所 TEL075(211)6348 一般財団法人 国民公園協会 京都御苑 TEL075(211)6364

講師 京都自然観察学習会の先生方に解説していただきます。

集合場所 京都御苑 富小路口(上京区京都御苑内南東)

受付時間 当日 9:00~9:20

参加費 保険料100円

その他 筆記用具をご持参ください。手持ちのルーペ、双眼鏡、図鑑などの観察用具や雨具があると便利です。



*4月・7月・11月に自然教室を予定しております。

「閑院宮邸跡」見学

京都御苑南西角にある「閑院宮邸跡」の収納展示室では、京都御苑の歴史や自然の資料が展示されています。庭園と併せてご利用ください。

収納展示室 9:00 ~ 16:00(16:30 閉館) 入場無料 休館日/月曜日(月曜日が祝祭日の場合は開館)、年末年始

御苑の花暦

Table with 3 columns: Name (和名), Flowering Period (開花期), and Main Observation Location (主に見られる場所). Rows include Sazanaka, Umegae, and Yabutsuki.

新年度会員募集

(平成28年1月~12月)

- 年会費 ●普通会費 1,000円以上 ●賛助会員(会社・団体) 10,000円以上

本会員への特典

- 1. 本会発行物をそのつど送付します。(御苑ニュースは会費収入で発行されています。) 2. 葵祭、時代祭の招待券を進呈します。(ただし、普通会員は会費4,000円以上の方に限ります。)

申し込み、問い合わせ先

一般財団法人 国民公園協会 京都御苑 住所 京都市上京区京都御苑3 〒602-0881 TEL075(211)6364

京都御苑ニュースのご愛読ありがとうございます。平成28年春号より、紙面デザイン等をリニューアルします。より読みやすくなる新生「京都御苑ニュース」にご期待ください。(発行人I)

御苑・いのちの風景・自然散歩のススメ 冬に歩く 河合 嗣生

御苑の樹々もすつかり葉を落とし、少し寂しげな季節となりまして。厳しく暑い夏が過ぎ、気持ちのいい秋は瞬時に終わり、また寒い冬の到来か...と思われ方もいるでしょう。でもこの冬こそ自然散歩のススメです。

春から夏にかけて子育てをした「夏鳥」たちは、南の暖かな地域に渡りを終え、代わりに日本より北の地域から厳しい冬を避けるために「冬鳥」と呼ばれる鳥たちがやって来ま

した。一年中ほぼ同じ地域に留まる「留鳥」に似た茶色ですが、今の季節は頭から首にかけて輝く緑色の鮮やかな特徴ある羽色(写真①)に変わっています。この個性的な羽色変わりは、冬に番を作るため、この羽色の特徴

から「あおくび」とも呼ばれます。樹林の中はどうでしょう。樹々の枯葉で地面が被り尽くされ、樹冠に鳥たちの姿も見つけやすくなります。樹々の枝先には、昆虫の卵や蛹がつき、根元の落ち葉の下には昆虫類・クモ類をはじめとする様々な生き物の冬越しの姿があります。エノキの根元にはユニークな頭の形をし

たゴマダラチョウ(タテハチョウ科)の幼虫(写真③)も越冬中です。私達人間は寒い季節、陽当たりの良い南側で過ごしたいものですが、昆虫たちはむしろ南側を避け北側に多くいます、どうしてでしょうか？北側は一日を通して低温ですが温度の急な変化が少なく乾燥もしません。昆虫類にとつて温度の変化や乾燥はエネルギー消費量が大きくなり冬を越すには不利だからです。彼らにとつて、冬は人間が考えるほど大したことないのかもしれない。

このような昆虫が越冬する場所を鳥たちはよく知っています。シロハラ(写真④)やツグミなどは樹々の根元の落ち葉をめぐり、ヒガラ(写真⑤)やエナガ、シジュウカラ、ヤマガラ、コゲラなどは樹々の枝先にぶら下がり樹皮に隠れる昆虫を探しています。もちろん地



①マガモ・雄(カモ科) 九條池



②マガモ・雌(カモ科) 九條池



③枯葉について春を待つゴマダラチョウの幼虫

面に埋もれている大切な食料である木の実は見落とされません。冬の醍醐味、それは雪風景でしょう。雪が降った後にはさまざまな生き物の生活の痕跡「フイールドサイン」を見つけやすくなります。鳥類であれば羽(写真⑥)や足跡、糞、糞がそれにあたり、直接の姿は見えなくてもその場所を彼らが何をしていたかを読み取る



④黄色いアイリングが特徴のシロハラ(ヒタキ科)



⑤枝先で餌を探すヒガラ(シジュウカラ科)



⑥林床に散乱する鳥の羽、ここで何が起こったのだろうか？

京都御苑の自然に親しむ 冬尺蛾

御苑の自然を楽しむ川合さんの観察記

川合 正豊



ナミスジフユナミシヤク 上・♀ 下・♂

冬尺蛾とは幼虫期を尺取虫の形で過ごし、晩秋から早春にかけて成虫となつて現れる蛾の仲間の総称である。珍しくはない。建物の内外壁などを注意して見て回れば、へばり付いているのが見付かる。明かりに集まることはないとされているが、明かりのつくような場所で見かけることが多い。外壁に止まっていたものは次の日にはいなくなっているが、内壁や天井に止まっているものは大抵

次の目にもいる。中には一週間後にもいたものがあつた。夜行性であることを考えて夜見に行つても、壁に止まつたまま動く様子はない。折角自分の子孫を残すため成虫となつて出て来たのに、雌を探しに行かなくてよいのか虫の事ながら気になる。ところで雌は飛べない。翅が退化して無いか縮小している。その雌が見たい。それは簡単そうに思えて、実は日にはいなくなっているが、内壁や天井に止まっていたものは大抵

移動範囲は限られるだろう。幼虫は寄主植物(幼虫期に餌として食べ、成虫となつて卵を産み付ける植物)の根元付近の土中で蛹になり、羽化した雌は歩いて周囲にある寄主植物を探し求め、そこで飛んで来る雄を待つ。雌の行動をこのように想像して、寄主植物を片っ端から見回ると、だが、全くと言ってよい程見つからない。個体数が少ないからなのか、探すポイントがずれているためなのか、今の所分らない。まだまだ工夫を巡らす必要がある。雌と雄との出会いの観察がこの冬にでもできることを楽しみにしている。

ことができず。冬は自然散歩に新しい楽しみとして加えてください。京都御苑・自然散歩の作法は五つ。一、ゆっくりと静かに歩こう。

二、木々の間を通る時は、ここを通りまですと感謝の気持ちで。三、小鳥たちを見つけたら立ち止まりじっとしよう。近くで魅力的な姿を見せてくれます。四、フイールドサイン

を見つけ、彼らの生活を想像しよう。五、地面の葉をめぐつたら、元あつた様に戻しておこう。これであなたも京都御苑自然散歩の達人です。

四季の変化は木々の変化でもあり多様な環境を生みます。まさにこれが生物の多様性にも一役かっています。皆さんも冬の京都御苑を楽しんでください。(京都自然観察学習会)